

発話速度の調節法

¹⁾ 新潟勤労者医療協会 下越病院 リハビリテーション課, ²⁾ 新潟医療福祉大学

○阿部尚子¹⁾, 西尾正輝²⁾

発話速度の調節訓練では発話速度を低下させ、これにより不正確な構音動作をより正確にし、その結果、発話明瞭度を改善させる。また、発声発語器官全体の協調性が高まることも、明瞭度の改善につながる。臨床的に、これほど劇的にかつ容易に明瞭度を改善させる言語治療手法は他にはなく、ディサースリアの治療において極めて重要な治療手技であるといえる。しかし、発話速度の調節法は、「ゆっくりと話しましょう」といった単なる言語的指導だけで効果が見られることはほとんどない。長い間習慣化されてしまった速度を変えるには、1) 特定の技法と、2) 体系的なドリルが必要である。

発話速度の調節法に関する技法は、強制的な発話速度の調節法とプロソディーを維持した速度調整法の2つのカテゴリーに分けられる。強制的な速度調整法には、タッピング法、ペーシング・ボード、モーラ指折り法、フレージング法、ポインティング・スピーチがあり、極めて容易に明瞭度を上昇させることができるが、自然度が著しく低下する。プロソディーを維持した速度調整法には、リズムック・キューイング法、DAF、視覚的フィードバック法があり、自然度があまり低下しないが、多くの学習が必要である。技法の選択方法は必ず、複数の技法と速度について臨床的施行を行ってから選択し、当初は明瞭度の上昇を最優先させ、のちに自然度との最適な関係を求める。

発話速度の調整法は、短文から開始し、長文、文の完成と体系的なドリルを活用することで、発話速度を調節する技法を獲得していく。スピーチ・リハビリテーション第5巻（総合訓練編）は2文節文から始まり、段階的に会話までレベルアップできるドリル集であり、とても有用である。

さらに、獲得した技法を般化させる重要なポイントは、訓練開始当初から単純な会話訓練を導入することである。会話訓練とは、言語訓練室の中での「できる発話」を生活の場における「している発話」へと般化させるために欠かすことのできないものであり、訓練を開始した当初から、最後の数分間、即興的な質問をして簡単な相互的なやりとりの練習をすることで、言語訓練で学んだ技法を自発話で使用させる機会を早期から提供する。会話訓練では、クライアントが返答する内容を単語レベルから開始し、短文レベル、長文レベルへと徐々に難易度を高めて訓練を進める。会話訓練の導入初期は、認知的負荷を軽減した質問形式が有効で、関心を一つに絞り込んで単語レベルで単純に返答できるクローズド・クエスチョンにすると、訓練した技法を即興的な発話ないし会話訓練で維持できる。会話訓練の実施中に、それまでクライアントが獲得してきた各技法の乱れが生じたら、一旦基本的技法に立ち戻って復習を行い、クライアントが習得してきた発話速度の調節法を再度復習してから、会話訓練に戻る。会話訓練は経験の少ないSTにとって難しいと思われがちであるが、インテルナ出版の言語聴覚障害と認知症がある人のための会話訓練集 第1巻は臨床家用マニュアルにたくさんの会話カード（会話のネタ集）についての解説が添えられており、知識が少なくても会話カードに沿って会話訓練を進めることができ、とても有用である。

■略歴

下越病院リハビリテーション課、新潟医療福祉大学大学院医療福祉学研究科修了。